

施設実習を通じた学生の変化と学び：実習後の自由記述より

著者	高橋 菜穂子, 松浦 満夫
雑誌名	大阪城南女子短期大学研究紀要
巻	49
ページ	137-154
発行年	2015-03-20
URL	http://doi.org/10.15043/00000045



施設実習を通じた学生の変化と学び

—実習後の自由記述より—

高橋菜穂子・松浦 満夫

保育士養成校における施設実習の役割

(1) 施設実習の概要

保育士養成校において、学生が直接的に児童福祉施設の機能を知ることができ、そこでの子どもや利用者、職員との関わりを通して、実感を伴う学びを得られる機会として、最も重視されるのが実習である。本学においても、保育者を目指す全ての学生が必修科目として保育実習を履修し、様々な知識やスキルの実践的な習得を目指している。

実習については、厚生労働省雇用均等・児童家庭局による「指定保育士養成施設における保育実習の実施基準について」(2001年発行／2013年一部改正)に準拠し、各校が独自の教育方針や理念、教員の専門性、養成校がおかれる地域の特性等を生かしながら学生の教育を行っている。保育実習には、保育所で行うものと、保育所以外の福祉施設で行うもの(以下、施設実習)の2種類がある。保育所以外の福祉施設には、乳児院、母子生活支援施設、児童養護施設、障がい児入所施設(福祉型、医療型)、児童発達支援センター(福祉型、医療型)、障がい者支援施設、指定障がい者サービス事業所(生活介護、就労支援、生活訓練等)、情緒障がい児短期治療施設、児童自立支援施設、児童相談所一時保護施設、国立のぞみの園が含まれており、本学では、その中で、乳児院、児童養護施設、障がい児(者)の入所施設及び通所施設での実習を行っている。

(2) 本学の施設実習のカリキュラム編成

本学は、短期大学(2年制)の1年次後期の10月下旬から11月初旬に保育士資格必修の施設実習(保育実習Ⅰ)を設定している。実習全体のカリキュラムとしては、1年次の9月に教育実習Ⅰ(幼稚園)、10～11月に保育実習Ⅰ(施設)、2月に保育実習Ⅰ(保育所)、2年次の6月に教育実習Ⅱ(幼稚園)、7月に選択科目として保育実習Ⅲ(施設)、9月に保育実習Ⅱ(保育所)を履修する。2年間の実習体系の中では、入学から7ヶ月程度の学びの期間しかない中での施設実習の時期設定である。この時期設定に合わせて、この6年間で保育実習指導Ⅰ以外の実習の事前指導関連科目の配置を順次変更してきている。現在は、1年次前期に、児童家庭福祉、社会的養護、社会的養護内容の3科目を前倒しで実施し、授業担当者も保育実習指導Ⅰとリンクするようにしている。また本学の教員配置の特徴としては、社会的養護内容の担当教員として、乳児院現場職員(非常勤講師)、障がい児(者)施設専門職出身の教員、児童養護施設を主たる研究領域とする教員を配置して、各専門領域を現場

実践に立脚した内容で教授している。そのことにより、①実習の基本的態度、方法、事前準備、日誌記入等を保育実習指導Ⅰ、②実習先となる施設に関する基本理念、制度、施設概要を児童家庭福祉、③社会的養護の理念、社会的背景、対象者の理解を社会的養護、④施設での支援内容、対象児と関わり方、職員の業務の進め方と意図等の演習を社会的養護内容で分担・連携して教示している。

(3) 本学における施設実習の事前指導の基本内容

本学の施設実習において、事前学習の柱は主に次の3点である。

第一に、実習先の各施設は、「生活の場」であるということである。施設は、そこで生活する子どもや利用者にとって家庭的な生活の場である。よって、支援者は、子どもや利用者の生活全体に対して一貫性をもって福祉的働きかけを行う必要がある。実習生は、対象者の生活の場に踏み込んで学ばせていただくのだという姿勢を事前指導では強調している。第二に、児童福祉施設での保育士の役割についてである。児童福祉施設においては、子どもの健全な成長・発達を、生活を通して援助しようとする。そのため職員の中で最も中核的な役割を果たす存在である保育士の業務や、保育士という職に期待される役割を実習の中で学ぶことが重要である。ただ職員の実践を見るだけでなく、日誌等に毎日記述することを通じて分析的に学ぶことができるよう指導を行っている。第三に、実習にあたっての基本理念・態度である。ここでは、岡村（1968）の「社会生活の基本的要求」に基づき、誰もが持つ「希望、願い、要求」、「あたりまえの生活」、「自立」の保障等について事前に学ぶ。障がい者福祉の「ノーマライゼーション」の理念を踏まえ、施設を利用されている障がい者、子ども達の生活欲求が、地域で「ふつうにあたりまえに暮らす」大多数の人々と同じであり、「特別な人、特別な生活」ではない、ということを強調して指導している。

(4) 施設実習の特徴と意義

施設実習の大きな特徴は、学生にとって全く体験したことのない現場で行う実習であるという点である。幼稚園実習や保育所実習であれば、自身が通っていた体験や、近所の幼稚園・保育所の様子を思い浮かべながら想像力を働かせ、実習に臨むことができる。しかし、施設実習の場合、ほとんどの学生は、実際に行ったことも見たこともない障がい者入所施設や、児童養護施設等で実習を行う。またそこでの子ども達や利用者の方々についても、授業や教科書等で知識としては持っているものの、実際に関わるのは初めてという学生がほとんどであろう。したがって、手持ちの知識では通用しない現場を前にして、自分たちの常識が打ち砕かれてショックを受けることもある反面、考え方が広がったり人間的な深みが増したりするきっかけにもなることが期待される。

また、施設実習の大きな特徴としては、上述の通り、子ども達や障がいをもった利用者の方々が暮らすプライベートな場である「居住空間」における実習が中心となるという点である。そこでは、日々の暮らしの中で、寝食を含めて、人々の生活の全体像をとらえながら、その中で生じる困難を支援していくことが求められる。そのため、実習生は手放しに歓迎される訳ではなく、幼い子ども

達からは人見知りされたり、中高生や大人の利用者からは拒絶されたりといったことも大いにあり得る。その中で、実習生も、その場の一員として、宿泊をし、子ども達や利用者の生活に寄り添うとともに、自分自身の基本的なマナーや生活態度、生身の関わりの中で生じる様々な心情についても見つめ直すことが求められる。

施設実習の意義としては、第一に、施設保育士の養成という点が挙げられる。保育士資格を取得した学生の就職先としては保育所が最も多いが、それ以外に、各種児童福祉施設で働く施設保育士という選択肢もある。実習をきっかけとして、将来の就職先として児童福祉施設を挙げる学生もみられる。しかし、本学の総合保育学科において、保育所以外の児童福祉施設を就職先として選ぶ学生の割合が、毎年平均5%前後であるということからも分かるように、就職を見越して、実践的能力を高めるために、児童福祉施設で実習を行うという学生は、本学においてはごく少数にとどまる。そこで、第二に挙げられる施設実習の意義として、学生の保育に対する視野を広げることができるという点がある。ここでは、多様な背景をもつ子どもや利用者と出会うことで、固定観念や偏見を脱し、幅広い視野を培うことができると考えられる。また、児童福祉施設で暮らす子ども達や利用者について適切に理解し、将来保育者として、地域の施設やそこで暮らす人達の権利擁護についても担っていく人材を育成することが期待される。

(5) 施設実習を通して、自分自身について振り返る

施設実習によって得られる学びについては、岩崎（2010）が主に以下の4点を挙げている。①保育の対象である子どもや利用者と、彼／彼女らの生活の理解。②生活の支援者としての保育者の役割と職務の理解。③児童福祉施設の社会的役割と今後の課題についての考察。④保育者を目指している自分自身についての考察。本研究では、特に④の自分自身についての考察を深めるという点から、そこでの学生の学びを検討したい。岩崎（2010）は、④の自分自身についての考察として、「実習を通して、初めて知る自分自身や意外な側面への気づき」を得ることによって、「今後どういう勉強をしていけばいいのか、苦手なものを克服するにはどうしたらいいかといった課題」を発見できることが重要であると述べている。

「保育士を目指しているのに、なぜ施設に実習に行くのか」、「なぜ子どものいない障がい者施設で実習をしなくてはならないのか」等の疑問が、毎年、施設実習前に学生から発せられる。しかし、保育者として働くということは、ただ保育所のことを知っていれば良いという甘いものではない。保育の対象である子どもや保育現場を知る以前に、対人援助職として働こうとしている自分自身を深く見つめ、自分が果たすべき役割について理解することも重要である。そのため、障がいを抱えた人々の日常生活における困難に目を向けたり、多様な子どもの背景に触れたりすることは、それまで自分の見知った世界で安住していた学生にとって、自分の足元を揺らがせるような体験となり、新たな価値観や、それまで意識していなかった自分の新たな側面に触れる貴重な機会であるともいえる。

本研究で明らかにするもの—学生自身の変化についての意味づけ—

(1) 質的研究を用いたアプローチ

本研究は、以上のように、保育所実習とは異なる独自の意義をもつ施設実習について、そこでの学生の学びを分析し、施設実習が果たしている役割について、学生自身のまなざしからボトムアップ的に理解するとともに、それを受けてさらなる施設実習の展望を示そうとするものである。

さて、施設実習を通した学生の変化や、自分自身を振り返る内省のありようを明らかにしていく上で、どのようなアプローチをとれば良いだろうか。ここでは、人々が、自分自身について振り返ったり、内省したりする時の、当事者の意味づけを明らかにするのに有効である質的研究と、その理論的支柱であるナラティブ・アプローチについて概観する。

質的研究者は、社会経験がどのようにつくられ意味づけられるかに重点を置いた問いに答えようとする (Denzin & Lincoln, 2006/2000)。やまだ (2007a) によれば、仮説演繹法のような因果関係を問うアプローチと、質的研究は問いの発し方が異なる。前者は「イエス・ノー」や「因果関係」で明快に答えられる問いを提示する方が良い研究ができるが、後者では「自由記述のように開かれた問い」、つまり、「『人はAの文脈でどのように出来事を意味づけるか?』」など、現場で複雑な相互作用によって生起する『出来事』『文脈』に関心を抱いて、問いを発する」という。そのような質的なものの見方の中核には、ナラティブ・ターンと呼ばれる認識論的転回が深く関わっており、ナラティブ、つまり、「広義の言語によって語る行為と語られたもの (やまだ, 2007b)」に着目しながら、人が自らの経験をどのように組織立てるのかを、全体的な文脈の中でしようとするアプローチである。なお、ここでの「語られたもの」とは、インタビュー等の対話場面での語りをはじめ、あらゆる表現物としてのテキストを指し、メディアや映像、文学作品、絵画までを含む幅広い概念である。

本研究で明らかにしようとする学生の学びは、知識の量的増大といったように、単一の価値軸で測れるものでもなく、また、第三者による評価の軸で点数化できるものではない。あくまでも彼らの意味づけに立脚した何らかの変化を指す。その変化は、右肩上がりの成長といった一次元的な枠組みで捉えられない、多方向に向かうものであると考えられる。そこで本研究では、上述のような質的研究を用いながら、学生が自分自身をどのように振り返り、そこでの変化をどのように意味づけているのかを明らかにすることによって、実習評価等からは捨象されてしまう、学生自身の学びや変化を明らかにすることを目指す。

(2) 本研究の目的

本研究では、施設実習における学生の学びを明らかにするため、実習終了後に学生が自身を振り返って書いた自由記述の内容を質的に分析する。ここで明らかにしようとする学びとは、第三者的な評価とは別に、学生自身が実習を通して感じる変化や、内省的な意味づけに特に着目するものである。

方法

ここでは、2013年度に施設実習を行った1年次の学生を対象とする。2013年度は、児童養護施設で66名、乳児院で25名、障がい児（者）施設で35名の、計126名の学生が実習を行った。本学では、施設実習終了後の直近の保育実習指導の授業内で、実習についての振り返りレポートを学生に記述させている（表1）。ほぼ1時間を使って書き上げ、授業時間内に提出することになっている。本研究では、この振り返りレポートの自由記述を分析対象とする。

表1 振り返りレポートの設問

1. 施設実習で学んだこと
1-① 利用者（子ども）から学んだこと（発達・育児環境・社会生活等にハンディのある利用者から学んだこと）
1-② 施設の職員から学んだこと（情熱や愛情、社会人としての姿勢、勤務態度、コミュニケーション等）
1-③ 生活施設ではじめての実習で学んだこと（生活習慣、環境整備、日常生活の支援等）
2. 実習を通して、自分自身をふりかえる
2-① 実習前（自分の考え方、施設へのイメージ、利用者の見方等）
2-② 実習後のふりかえり（自分自身の変化と今後の課題）
3. 今後の施設実習のために
3-① 実習中、うれしかったこと
3-② 実習中、困ったこと

(1) 分析の対象

今回の分析対象は2013年度の保育実習Ⅰ受講生126名中、授業内で回収した109名分の振り返りレポートである。紙幅の関係から全ての設問を網羅することは難しいため、本研究の目的と照らし、自分自身の変化に関わる記述が特に表れる箇所として、設問2-②に限って分析した。他の設問は、実習先の種別に応じて、利用者や子どもから学んだことや、職員から学んだことなど、実習内容の振り返りが中心であるのに対し、設問2では、それぞれの施設の種別や条件、実習内容を超えて、学生に自分自身を振り返ることを促し、実習の中で自分がどのように変わったのかを問うものである。ここでの記述が、最も率直に、学生自身の変化や学びを表していると考えられる。なお、設問2は、2-①、2-②から構成されており、2-①では実習前の自分自身を振り返る設問となっている。ここでは2-①については直接の分析対象としないが、2-②の回答が、2-①の記述を踏まえた内容になっている場合等は、適宜参照しながら分析を進めた。あわせて、2-②の記述について理解するために、他の設問の記述を参照することが必要となった場合等は、適宜、他の設問について

の記述も参照しながら分析を行った。

(2) 分析手続き

分析は、川喜田（1967）および、やまだ（2003）を参照し、共著者2名で行った。まず、学生の普段の様子や、実習の評価、学生と教員の関係等による分析への影響を避けるため、レポートは全て匿名に処理した上で、分析を開始した。

振り返りレポートの全設問を熟読し、全体の中で当該設問（2-②）がどのような位置づけにあるのかを確認した。次に、当該設問の記述を切り取り、カード化した。基本的には1枚のレポートにつき1枚のカードを作成した。ただし、複数の内容について含まれているものは、分割してカード化した。カード化する際、意味内容が重複する箇所や、冗長な記述、個人情報等を含む記述についてはカードから除外した。最終的に作成されたカードは126枚である。

次に、各カードをバラバラに並べ、互いに親近感を感じるカードを1カ所にまとめた。一文が長く、複数の要素が含まれているようなカードについては、研究目的と照らし、学生自身の変化について最も表現されている箇所を中心に分析するようにした。その結果、15個の下位グループに編成した。それぞれの下位グループについて、そこにまとめられた記述のエッセンスを表す「一行見出し」をつけた。次にその「一行見出し」を眺め、再び「似ている」と感じるものをまとめることを繰り返し、最終的に5つの上位グループにまとめた。最後に個々のグループの図解化を行い、その意味連関を総合的に素描した。

結果

分析の結果、学生の記述は図1のように図解化された。上位グループは、①【施設に対するイメージの変化】、②【視野の広がり】、③【子どもや利用者への理解の深まり】、④【知識や技能を習得】、⑤【進路や将来像の変化】の5つである。上位グループはそれぞれ、2～4個の下位グループからなり、各下位グループについては、図1に見出しを示し、それぞれ何枚のカードから構成されるのかを（）に記載した。

以下では、それぞれのグループの記述について順番に説明する。なお、本文中で学生の記述を引用する箇所は「」で括る。

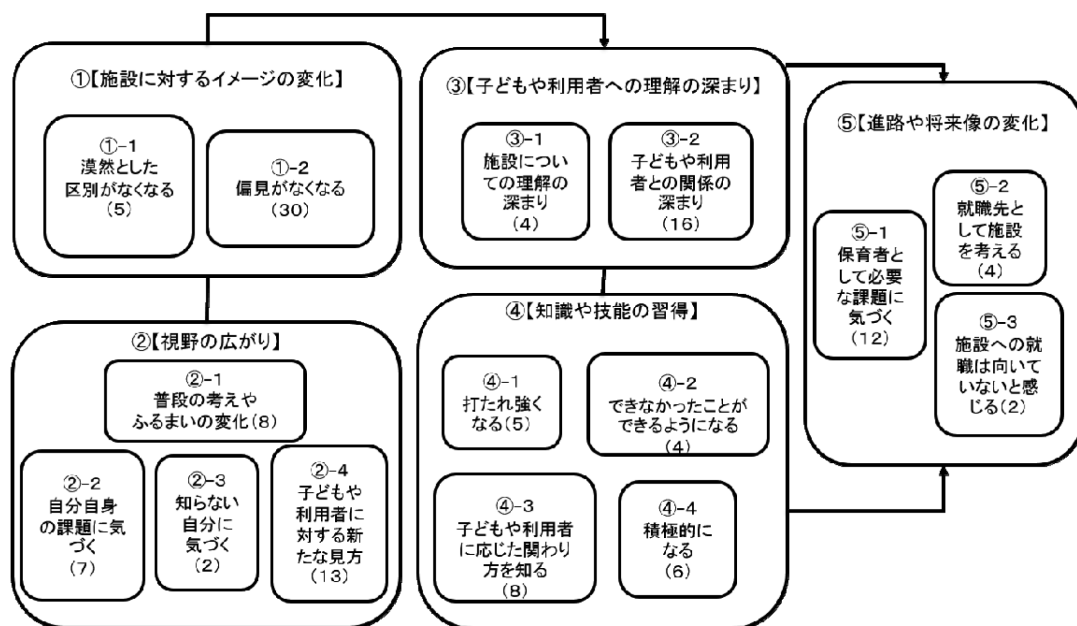


図1 施設実習における学生の変化

①【施設に対するイメージの変化】

学生の記述で最も多かったのがこのグループである。このグループは、施設や、そこで暮らす子どもや利用者に対する『漠然とした区別がなくなる』、『偏見がなくなる』という2つの下位グループからなる。

施設実習を終えた学生の多くが、実習前に抱いていた自分自身の偏見を自覚する。それは、例えば、「障がい者はこわい」、「児童養護施設は暗い場所」といったものである。また、まだ見ぬ施設に対し、偏見とも言えない漠然としたイメージを抱き、未知から来る不安を感じていたような場合も多い。「特別な子どもがいる場所」、「自分たちとは違う世界」といったものがそれである。実習後、多くの学生が、そのような、自分自身が抱いていたイメージに自覚的になるとともに、実際に現場に入ること、それらのイメージが払拭され、新たな施設像を作りあげている。

①-1 「漠然とした区別がなくなる」

ここでは、例えば、「児童養護施設の子どもたちも、普通に幼稚園に通い、友達を作り、普通に外で走り回ったり、お家（施設）でおもちゃで遊んだり、本当に周りの子どもと何も変わらない子どもだった」といったという記述が示すように、学生は、実習前に漠然と「特別」な子ども達であると想像していた児童養護施設の子ども達が、幼稚園に通ったり、遊んだり、自分たちと変わらない「普通」の存在であることを実感的に学ぶ。施設に入所している子どもも、「普通」の子ども達であり、一般家庭の子どもと少しも変わらないということは、当たり前と言えば当たりのことである。しかし、多くの学生が、現実には施設を知らず、関わりがなかったことから、施設に入っ

ている子ども達は、何か自分たちとは異なる性格や特性をもった「特別」な存在なのではないかといったイメージを勝手に作り上げ、自分たちとは無自覚的に区別している。そのことに実習を通して改めて気づくのである。「自分が思っていたよりも、(子ども達は)皆とあまり変わらない生活をしていると思った」という、単純ではあるが学生にとって本質的な気づきが示すように、漠然と抱いていたイメージは、実際に関わった現実の子ども達によって書き換えられ、自分達や、「普通」に幼稚園に通っている近所の子ども達と変わらない存在としてとらえ直されていく。

①-2 「偏見がなくなる」

このグループの記述は、①-1の「漠然とした区別」とは異なり、はっきりと、自分たちが抱いていた「偏見」を自覚し、実習後にそれが解消されたという記述である。例えば、「実習前までは、公共の場で障がい者を見ると怖いなと思ってしまっていました。でもこの実習で障がい者のイメージが180度変わり、今では一人の普通の人として見るができるようになりました」というように、自分自身の偏見に気づき、「自分が思っていたイメージは、当てにならないただの偏見の塊であることが身にしみてよく理解できた」という。

また、「実際に乳児院にいったみて、授業やテレビで見た『虐待された子どももいるから荒れている』というイメージは、私の中だけのイメージであって、実際の子ども達は一般の子どもより人懐っこいように感じました」というように、テレビドラマの影響や、授業、連日の報道等で触れる虐待事件から作り上げたショッキングなイメージが、現実の子ども達と関わる中で変化したという記述もみられる。

②【視野の広がり】

このグループは、自分自身や、施設で暮らす子どもや利用者に対して、何らかの形で視野が広がったという記述から構成される。具体的には『普段の考えやふるまいの変化』、『自分自身の課題に気づく』、『知らない自分に気づく』、『子どもや利用者に対する新たな見方』の4つの下位グループからなる。

②-1 「普段の考えやふるまいの変化」

実習後、「普段の生活の中でも、支援が必要な方がいれば一言声をかけ、実習で学んだことを生かしていきたいと思いました」というように、普段のふるまいにも変化が起こったという学生がいる。彼らはまた、障がい者施設で、利用者から「電車や街などで避けられたり、笑われたりする」という体験を聞き、自分では気づかない何気ない日常の中にも差別が存在し、傷ついている人がいるという事実と直面している。さらに、利用者から、「今後困っている人がいたら、周りが避けていても助けてあげて欲しい」と言われたり、職員の「障がい者への理解を深めたい」という思いに触れたりすることを通して、自分も何か協力したいという気持ちが生まれ、自分自身の果たすべき役割についての自覚が芽生えた学生もいる。

また、このグループの中で多く見られた記述は、「親のありがたみ」を知ったというものである。

例えば、次のようなものである。「実習前は家では何もせず、全部お母さんが家のことをしていました。この施設実習では、洗濯、掃除、洗い物など、(普段)家でやることがとても多く、実習から帰ってきて、家のことを自分からするようになったり、(中略)、お母さんの大変さやありがたみを知った実習だと思いました」。このように、実習での生活が、普段の生活にも影響を及ぼすというのは、生活施設での実習を終えてこその変化であろう。

②-2 「自分自身の課題に気づく」

学生は、実習を体験しなければ気づかない自分自身の課題にも気づく。例えば、「心から思ったのが、私は積極性がなさすぎるということです。初日から子ども達に話しかけることができず、行事がなければ全員の子も達と会話はできなかっただろうなと思いました」、「課題は職員さんとコミュニケーションをとっていくことだと思いました。遠慮してしまい、質問できなかったりしたので、もっと積極的になり、コミュニケーションをとっていきたいです」というように、積極性を課題に挙げる学生は多い。施設実習の現場が生活施設である以上、そこは子ども達や利用者にとってプライベートな空間であり、実習に訪れる学生は異質な存在である。普段、コミュニケーションが円滑に取れる友人の間で安住している彼らにとっては、従来の対人関係パターンを崩し、新たなコミュニケーションの中に飛び込むという体験によって、自分自身の課題と直面するのであろう。普段ならば苦手なことにあえて直面しなくても、やり過ごすこともできるが、それが許されない実習という状況の中で、自分自身の課題を突きつけられることは過酷な体験である。しかし同時に、今後自分が何をしなければいいのかという具体的な指針を与えてくれる貴重な体験でもあると考えられる。

②-3 「知らない自分に気づく」

施設実習の中で、多くの学生は、これまでの自分を根底から揺さぶられるような経験をする。乳児院では、普段、学生がほとんど関わることのない新生児や乳児との関わりが待っているし、児童養護施設の場合、自分と年齢の近い中高生との関わりや、活発な小学生との関わりなど、幼稚園や保育所の実習では体験することのできない関わりが待っている。さらに、実習生として短期間施設に入るため、子ども達からは、無視されたり、暴言を吐かれたりといったような手痛い試し行動を受けることもある。その際、「自分ってこんなに怒ってしまうんだと気づいた」というように、自分自身の否定的な側面に初めて気づくこともある。また、生活施設の場合は特に、危険な行動やけんかが起こった際、時には子どもや利用者を制止したり、注意することも求められる。子ども達を注意するという初めての体験を経て、「怒り方は母そっくり」であることに気づき「何度もやめたいと思った」という学生もいる。学生は、普段の生活では表面化することのない、自分自身の否定的な側面や、目をそらしたくなる姿に直面していくのである。

他方で、自分自身が無自覚であった肯定的な側面に気づく場合もある。『「ただ座っているだけで子どもが寄ってくるのはすごいこと』と、職員さんに言ってもらった時は、(中略)すごいって言ってもらっていることは、私が持っているものなんだと気づいた」というように、自分のもっている良い面に気づくこともできたという。

②ー4「子どもや利用者に対する新たな見方」

ここでは、例えば、児童養護施設や乳児院などでの実習を通して、「家族」というものに対する固定的な見方を脱したり、子ども達の背景について、新たな見方ができるようになったというような記述を挙げる。児童養護施設で実習を行った学生は、「家の話も皆どンドンしており、話してもいいことに驚きました」というように、施設に入所している子どもが必ずしも肉親や家族の話題を避けているわけではなく、時にあっけらかんと自身の生い立ちや家族について語ることに驚いたようである。そして、子ども達から家族の話の聞く中で、「離れていても子ども達はお母さんが大好きなんだな」というように、一緒に暮らしていなくても、気持ちでつながっていたり、親を求めていたり、これまで抱いていたものとは異なる家族のつながりに気づく学生もいる。そういった気づきを通して、これまで自明のものとしていた家族観が揺らいだり、問い直したりするような様子もみられた。

また、「子どもが急に怒ったり、無視をしたり、逆にべったりとくっついてきたりした時、初めはどうしてそんなことするのか？と疑問に思い、すごく戸惑ったけれど、子どもと関わっているうちに、本当は構ってほしいのかな、とか、自分を見てほしいのかな、と分かるようになって、子どもの気持ちを考えて、ある程度しつこくその子どもと関わっていると、なついてくれたり、嬉しそうに遊んでくれるようになりました」というように、子どもに対する新たな視点を獲得することが、次の行動や子どもとの関わりにも変化をもたらしている。子ども達から暴言を吐かれた時にも、「それが本心ではないのでは」と、言葉には表れない子どもの内面に思いを寄せるとともに、時には発言の背景に思いを巡らせ、「その子達は私の経験したこともない辛い経験が過去にあり、今ここにいる」ということが理解できたという。

障がい者施設では、「衣服の着脱、洗濯物をたたむなど、各自、自分で行っている利用者が多かった」と、素朴な驚きを感じる学生もいる。「援助しない又何もできない」存在であると漠然と感じていた利用者には、当然のことながらそれぞれに症状や特性がある。そして、「物事への理解度に対して、同じ等級であってもかなり個人差がある」というように、「障がい」と一括りにはできないことを知る。さらにその程度によって援助の仕方が違ってくるということに、学生達は、実習を通して実感的に気づいていく。「話すことのできない利用者の方は、手を引いたり、指を示すなどの行動で自分のしたいことを示していた」というように、それぞれ自己表現の手段があることに気づいた学生もいる。それと同時に、「利用者同士が互いのことを理解し合っているの、思いやりや好意、冗談の言い合い等、健常者と何も変わらないなと思いました」というように、利用者同士の交流に触れるにつれ、表現の仕方は違えど、その奥にある双方向的な感情の交流や、それによってもたらされる和やかな心情は、自分たち「健常者」と何も変わらないのだということにも気づいていく。

③【子どもや利用者への理解の深まり】

このグループは、『施設についての理解の深まり』、『子どもや利用者との関係の深まり』という2

つの下位グループからなる。②－４のように、実習前に抱いていたイメージに対して新たな見方や視点を得たという記述とは異なり、実習期間を通じて理解が深まったり、関係が深まったりしたという記述をまとめる。

③－１「施設についての理解の深まり」

実習を通して学生は、授業の中で説明を聞いているだけでは分からない施設の中の様子について理解を深めるとともに、短期間ではあるが、生活をともにする中で、そこで暮らす子どもや職員にとって、施設がどういう場所であるかということ、少しずつ経験的に学んでいくようである。

例えば、児童養護施設で実習を行ったある学生は次のように書いている。「幼児担当の先生に、『母親の前では（子どもは）しっかりするが、施設の中だと暴れたり、言うことを聞かなかったりする』と聞いた時、素の自分を出せるのが母親ではなく施設の先生だったりするんだと思い、その時、『施設は家』ということ少し理解できた気がした」。また、「幼稚園と違い、子どもがいない時間も、洗濯物や掃除、洗い物などをし、子どもが帰ってくれば子どもと遊び、１つのことだけをこなすのではなく、『子どもの生活』全てを一気に見ること、関わっていくことの大変さを知りました」というように、生活の場である施設の特性や、必要とされるものに気づいたという学生もいる。

③－２「子どもや利用者との関係の深まり」

乳児院で実習を行った学生は、そこでの子ども達との関係の深まりについて「初日は人見知りの子どももいて、私が近づくだけで泣いていたが、日を重ねるごとに少しずつ距離が縮まっていった。勤務時間を終え、部屋を出ようとすると、帰らせないように扉の前で座っていたり、泣いて足から離れようとしないうちを無理に引き離すのは辛かった。（中略）子どもは小さなことでも褒められることをとても喜び、見てくれているんだと安心するのだと思った」と書いている。

児童養護施設で実習を行った学生も同様に、子ども達との関係の深まりを次のように書いている。「始めは、小学生～高校生の男の子達とどう関わっていいのか分からず、孤独を感じることもありましたが、そんな私に積極的に関わってくれる子がたくさんいたので、時間が過ぎていくうちに、自然に楽しんで関わることができました。（中略）無視されることもたくさんありましたが、それでもめげずに笑顔で挨拶をする勇気が、その後の子ども達との関わりを変えていくということも学びました」。

障がい児施設で実習を行った学生は、「初めは戸惑っていましたが、日が経つにつれ、子ども達一人ひとりのことも少しずつ理解することができ、たくさん話をしたり、コミュニケーションをとることができました」と書いている。障がい者施設でも同様に、「私の言葉かけに対しての返答がない人がたくさんいたが、ちゃんと私の言った行動をとって下さったので、ちゃんと伝わってるんだと思った。そう感じてからは、『段差ありますよ』、『手すりにつかまってくださいね』、『食堂へご飯を食べに行きましょう』など、理解されているので、一方通行の声かけと思わずに、たくさん声かけをする大切さを学びました」と書いている。

また、利用者や子ども達との関係が深まる一つの契機として「名前と呼ばれる」という体験を挙

げる学生もいた。障がい児施設で実習を行った学生は次のように書いている。「実習初日は自分のことではしゃいで、子どもを不安にさせてしまう部分がありましたが、徐々に慣れていき、子ども達一人ひとりの個性や『この子はこのように伝えたら分かってくれる』ということが分かりました。名前も、『実習生さん』と呼ばれていたのが名前で呼ばれることも増え、不安だった思いが、子ども達に助けられ、勇気、元気をもらいました」。

④【知識や技能の習得】

2週間に及ぶ施設実習の中で、学生達は自身のものの見方が変わったり、視野が広がったり、課題に気づいたりといった様々な変化を感じる。その中でも大きな成果として、できなかったことができるようになったり、新たな技能や知識を身につけたりと、自分自身の成長を感じる学生が多い。それらの記述を、このグループでは【知識や技能の習得】としてまとめる。このグループは、『打たれ強くなる』、『できなかったことができるようになる』、『子どもや利用者に応じた関わり方を知る』、『積極的になる』という4つの下位グループからなる。なお、ここでの記述は、実習評価によって裏打ちされたものではなく、あくまでも学生自身の実感として記述されたものである。

④－１「打たれ強くなる」

施設実習は、生活施設で行う実習であるため、時に、子ども達や利用者とうまく関係を築くことができなかったり、反発されたりすることもある。その上、泊まり込みであることから、相談できる相手が限られる中、自分の力で困難を乗り越えることが必要とされ、そういった経験を経て、「精神的に強くなった」、「打たれ強くなった」と感じる学生がいる。例えば、児童養護施設で実習を行った学生は次のように書いている。「精神的にも強くなりました。最初は暴言や試し行動に悩まされ、辛い思いをしました。でも、子どもと関わって学ばないと何も始まらないと思ったので、粘り強く子どもと関わっていきました。実習の初めの頃は、暴言などにいちいち落ち込んで、考え込んで、自分には向いていないなど、もう子どもとは関わりたくないと思ったこともありました。でも何よりも自分らしくあること、マイナスな考え方はしないこと、積極的に関わっていくことが大切だと思いました」。

また、同じく児童養護施設で実習を行った別の学生は、「(子どもから)『あっち行け』と言われても、ネガティブになるのではなく、ポジティブ思考でいたら、何とかなった」と書いている。子どもとの関係を築く上では、子どもの言動それ自体が問題なのではなく、自分自身の受け止め方が重要なのであり、それ次第で子どもとの関係が変わっていくということを学んでいくようである。他にも、宿題を見る時に、子どもに嫌がられても、粘り強く隣に座り続けることで、子どもとの関係が深まったという学生もあり、「あえて、空気を読まないのも悪くないなと思った」と書いている。

④－２「できなかったことができるようになる」

乳児院では、それまで乳児と関わるのがほとんどなかった学生達が、「授乳」、「沐浴」、「おむつ替え」などのスキルを習得していく。「最初の授乳はぎこちなくて、姿勢も悪かったけど、だん

だんと慣れてきて、最終日には4回ぐらい授乳をさせてもらい、姿勢もよくなり、赤ちゃんも最後まで飲んでくれた」、「初めの頃はおむつ替えに必死で、言葉かけをすることがあまりできなかったけれど、経験をしていくうちに、言葉かけをしながらおむつ替えができるようになった。(中略) 子どもを寝かしつける時は、背中をとんとんとしたり、子守唄を歌ったりなど、少しずつできるようになり、子どもが寝付いてくれるようになった」というように、具体的なスキルを習得することも学生の大きな学びであると考えられる。

児童養護施設で実習を行った学生も同様に、「初めはどの棟に入っても、何をすればいいのかということばかり考えてたけど、(中略) 実習3日目くらいから、行動範囲が増えて、視野も広がり、充実した実習をおくれた」と書いている。この中で、例えば、「今はこれをしないといけないから少し切り上げて用事を済ませ、またそれが終わったら子どもと関わる」というように、見通しを立てて実習を行うことができるようになるといったこともあったという。

④－3 「子どもや利用者に応じた関わり方を知る」

ここで習得される知識やスキルは、机上で学ぶものとは異なり、目の前の子どもや利用者に応じた具体的な関わりであり、そのような関わりに触れることも重要な学びであると考えられる。「乳児院に実習に行って、年齢の低い子ども達にどのように接すれば良いか少し学べた気がします。ただ命令口調で言うのではなく、遊びを通して子ども達に教えてあげることや、否定的な言葉かけではなく、肯定的な言葉かけをすることによって、子ども達も『認めてくれている』と思えるような言葉かけが必要なんだと思いました」というように、子ども一人ひとりに応じた関わり方があり、「全てしてしまうと子どもが成長できない」ため、援助の仕方も子どもの成長によって変わってくるということも学んだという。

④－4 「積極的に動けるように」

実習の初期は、業務内容を覚え、子ども達の名前を覚え、自分自身が施設の生活になじんでいくことで多くの学生は手一杯になる。そんな分からないことだらけの中、子ども達や利用者と関係を築くことに対して尻込みし、緊張や気恥ずかしさ、拒絶されることへの恐れから積極的になれない学生もいる。しかしその中でも、「実習生だからといって、どこまでしていいのか分からずに、何もしていないよりかは、何か行動をした方が良いという感情の変化が一番大きい」というように、行動しないよりはした方が良く自分の殻を破っていくことの大切さに気づく。そして、「ぶつかっていけばなんとかなった」というように、積極的に子どもや利用者に関わることで突破口が見えるということに気づいていく。児童養護施設で実習を行った学生は、「幼稚園実習に行って、積極的に取り組めず、同じことを2度と繰り返さないよう意識していたのですが、1週目は殻に閉じこもってしまっていた自分を2週目で挽回し、一歩進んでいくことができました。子ども達とも距離がある中に、自分から進んで入っていき、仲良くなれ、通りすがりに声をかけられるようにもなりました」と自分自身の変化を振り返っている。

⑤【進路や将来像の変化】

施設実習では、施設保育士という一つの進路を見据えながら、児童福祉施設という現場に入っていく学生もいる。その中で、実際の現場での経験から、自分は施設保育士に「向いている／向いていない」といった適性を見極めることもある。他方で、それまで全く考えてもいなかった施設保育士という進路が、実習後に将来の選択肢として急浮上することもある。またそれだけでなく、思い描いていた保育者像に変化が起きたり、望ましい保育者になるために必要な課題が見えたりもする。このグループでは、上記のように、自身の進路や将来像に何かしらの変化が起きた記述をまとめる。このグループは、『保育者として必要な課題に気づく』、『就職先として施設を考える』、『施設への就職は向いていないと感じる』という3つの下位グループからなる。

⑤－１「保育者として必要な課題に気づく」

ここで書かれている課題とは、②－２で取りあげたような、自分自身の課題とは異なり、保育者という将来像を思い描いた時に、浮かび上がる課題である。例えば、「利用者同士のトラブルが起きた場合、実習生としてしなければならない事を瞬時に冷静に考えることができるよう、判断力をもっともっとつけなければいけないと思った」、「初めの頃、子どもとの関わり方で戸惑ってしまい、子ども達と関わるまでに時間がかかってしまったので、今後の実習や将来の就職時には、子どもと早く関わるができるよう、今回の実習を生かし、考えていきたい」というように、実習を終えて、学生は、将来保育者として働く自分をイメージしながら、今の自分を見つめ直し、課題を挙げている。さらにその中で、「保育所保育士を目指しているのに、なぜ障がい者施設に実習に行くのか」といった実習前に抱いていた疑問に、実習を通して自分自身で答えを見つけていくような記述も見られた。例えば、障がい者施設へ実習に行った学生は次のように書いている。「やっている内容は障がい者施設も幼稚園も、人に何か教えるという点で一緒であり、ただ年齢が違うだけで、これから幼稚園にも障がいを持った園児も入園してくると思うので、どのように対応するのかも覚えておいた方がいいよと職員の方が言っていて、障がい者施設でも経験できてよかったなと思いました。今後私が幼稚園で働いた時、障がいをもった園児が自分のクラスにいたら、どのような対応をし、皆と同じクラスで、皆と同じようなことをどうすればできるかなど、分かっていたいと思います」。

⑤－２「就職先として施設を考える」

実習を通して、これまでほとんど知らなかった障がい児（者）の施設や、乳児院、児童養護施設での生活を経験し、自分自身の将来について具体的な変化が起こる学生もいる。ここでは、就職先として新たに保育所以外の児童福祉施設を考えるようになった学生の記述を挙げる。

児童養護施設で実習を行った学生は次のように書いている。「毎日大変で、たくさん悩み、子どもとの関わりが難しく、たくさん泣いたこともあったけど、日が経つにつれて、できてくる信頼関係、目に見えて分かる子どもの成長。こういったことは幼稚園や保育所では経験できないこと。たった何年の関係でなく、その子を一人の社会人になるまで見守り続けることが出来る場所というのを聞いて、保育所という志望の他に、この施設という選択肢も広がり、よかったなと思いました」。

その他にも、同じく児童養護施設で実習を行った学生は「なぜ行かなければならないのだろうと思っていた実習も、3日目をむかえたくらいから楽しくなって、この仕事も悪くないなあと思い始めた。(中略) 実習生が行っていることと、職員が毎日ここで働いていることは、全く比べ物にならないくらい違うし、大変だとは思いますが、ここで学び、この仕事を素敵だと思った」と書いている。

障がい者施設で実習を行った学生は、「もっと障がいのことを学んでいき、障がい者施設でも働いてみたいという気持ちになった」と書いており、実習を通して、新たな進路が浮上するというだけでなく、それに伴って、自分自身を振り返ったり、さらに学びたいという意欲が生まれていることも、重要な学びの成果ではないかと考えられる。

5-③「施設への就職は向いていないと感じる」

他方、実習を通して、施設保育士という仕事は自分には向いていないということを実感する学生もいる。児童養護施設で実習を行った学生は次のように書いている。「施設実習を終えて、初めて子どもをかわいくないと思い、子どもと関わりたくなくて雑務を必死で探していた自分自身に驚きました。気持ちの問題、仕事に対しての考え方が一気に変わりました」。その結果、「本当にこの道は向いていない」と感じたという。このように、自分自身の苦手なことや向いていない分野に出会うことは、必ずしも否定的な意味をもつものではない。短大の1年生として、自分の進路を考え始めたばかりの学生は、そのような苦い体験を経て、自分の向き／不向きや、得意／不得意を見極め、今後の切実な課題や次回からの実習の具体的な目標をそこから見つけていくことができるからである。乳児院で実習を行った学生は、「1人ひとりの子どもに対しての対応も違っていて、その違いを考えて区別するのが難しいと感じた。そういう判断が全然出来なくて、この先できるか不安になったし、向いていないのかなと思った」と書いている。机上の知識だけをもって、実際の対人援助の現場に入ることはできない。実習という機会を通じて、自分の苦手な点や足りない点についても現実的に理解し、自分なりの目標を見つけていくことが重要なのである。

考察

(1) 学生の変化と学びの諸相

①偏見の払拭と実感に即した新たな施設像

今回、学生の実習後の自由記述を手がかりとして、学生自身がとらえる自分自身の変化を分析することを通して、そこでの学生の学びの諸相が明らかになった。中でも、大きな変化として明らかになったのが、施設に対する「偏見」や「思い込み」に満ちたイメージの払拭と、新たな子ども像、利用者像の獲得である。事前学習で強調したノーマライゼーションの理念が、実習での具体的で生き生きとした体験を通して、実感的に理解されたことは大きな学びであると考えられる。

施設の利用者や子どもの生活の姿が、実習に赴く学生たちの生活欲求や生活経験と比べて、何ら特別なものではなく「同じ」部分が大半であること、自分たちと区別できるものではないことを知

ることによって、「偏見がなくなる」、「(自分自身が抱いていた偏見が) 身にしみて理解できた」というイメージの変化につながっている。障がい者施設での実習を終えた学生は、「障がい」と一括りにできない利用者の個人差やそこでの支援の多様性を学んでいる。利用者同士の経験的な相互理解や思いやりの多い行動、コミュニケーションの豊かさにふれ、私たち「健常者と何ら変わらない」と気づくことは、実習という現場実践でしかできないノーマライゼーションの学習である。また乳児院や児童養護施設でも同様に、施設で生活する子どもたちとの対話から、彼らの家族像や親のイメージを知る中で、家族や親を求めている姿が、学生たちの持っている家族や親への思いと同じであることを学んでいる。そのことで、現在の学生自身の家族との関係性、知らず知らずのうちに親から受けている影響、親のありがたみといったものを確認できたと考えられる。

②視野の広がりそこから生まれる自信

必須の実習により学生が未経験で異質な生活空間にひとりで放り込まれるという状況の結果、自身の対人コミュニケーション面の脆弱性に気づき、逃げ出したい気持ちと戦いながら、目の前の未知のコミュニケーションに立ち向かい乗り越えていく姿が、学生の変化につながっていく様子も明らかになった。例えば、実習初期の「ためし行動」に立ち向かいながら、自身が気づいた方法(表情、笑顔、あいさつ、声掛け)でしかそれらを乗り越えられないことを学んだ学生もいる。これは、彼らが、友人を中心とした自分自身で構築できる、過ごしやすい普段の人間関係と違う空間での対人コミュニケーションを学ぶ機会となっている。実習初期の辛さを乗り越える中で、学生は、忍耐強く自分から関わらないと進めないこと、マイナス思考から前向き思考への切換えの必要性、利用者の言動に対しての自身の受け止め方(姿勢)こそが関わり方を打開する主因であること等を体験的に学びとっている。「行動しないよりは何か行動した方が良い」という感情の変化が、実習中盤からの彼らの積極的な行動を生み出している。自分の殻を破ることの大切さに気づいたことは、その後の実習生自身を変化させていくし、今後の実習においては一つの自信になっていくと考えられる。

また、各施設では、保育士の見守りと指導のもと多くのスキルを経験的に習得していることが明らかになった。スキルの積み重ねが、「できなかったことができるようになった」という具体的な自信となり、実習生の方にも精神的余裕が生まれ、行動範囲や視野の広がり、見通しをもった行動といった実習後半での学びの充実につながっている。さらに、スキルの習得により、個人差に応じた具体的な関わり、「遊び」を通した肯定的な子どもへの声掛けや働きかけの大切さ、成長に合わせた部分的援助の重要性といった支援の奥深さについても学び取れるようになる。

③実習を通した将来像の変化

将来、保育所や幼稚園の保育者を見据えている学生は、実習中の子どもや利用者への関わりの経験を保育所等で生かしていきたい、保育所等で障がい児がクラスにいる場合に障がい者施設での実習経験が多いに活かせる、といった具体的な将来への展望を獲得している。さらに、施設実習を通

して、乳児院や児童養護施設、「障がい」の仕事への就職意志がより強くなった学生、保育園や幼稚園と並んで施設が就職先の選択肢に加わった学生も見受けられる。こういった学生は、実習を通して、施設での支援の難しさや奥深さと同時にやりがいの大きさを学びとっていることが多い。施設への就職希望と同時に、障がいや社会的養護といった分野への学習意欲が大きくなっていることも一つの成果であると考えられる。

一方、自身の進路として「施設」が向いていないと感じた学生もいる。施設実習を終えた段階ではまだ1年生ではあるが、施設での業務や、子ども、利用者との関わりが「自分には向いていない」と考える学生や、保育者としての仕事そのものに対して自身の未熟さを痛感し、迷いが生まれたという学生がいる。実習を通して感じた学生自身の「未熟さ」、「不向き」、「自信のなさ」といった気づきは、当の学生のみならず、養成校の教員にとっても、振り返りを通した事後学習の重要性を突きつけるものである。もちろん、入学から8カ月程度の時点において、早急に進路選択と結びつける必要はない。それよりも必要なのは、今後の授業や実習の中で、それらの課題と繰り返し向き合い、そのつど自分自身を見つめ、自分自身や将来像を問い直すことを通して、自分の将来を模索していくプロセスであると考えられる。

(2) 保育士養成校における施設実習の課題と展望

最後に、施設実習が、保育士養成校での資格取得において必修科目になっていることを前提としながら、養成校における施設実習の課題として、今回の分析から見えてきたことをまとめてみたい。

1年次の施設実習では、施設保育士への進路につなげることは主たる目的ではない。保育士として今後の実習や2年次までの学びの土台となる、対人援助への素養、意欲を育み、また現場実習体験の中で、対人援助者として今後学生自身に求められる基本事項を理解することが第一である。初めての施設実習で、学生自身が壁に当たり自己覚知し、さらにそれを乗り越えて実習を達成する。このプロセスが重要であり、多くの学生が経験するであろう「試行⇒混乱⇒拒否・逃避⇒自己反省⇒課題発見⇒再試行⇒自己覚知⇒達成」という実習のプロセスを、実習担当教員が理解し、実習先施設の施設長や担当者、養成校の専任教員（巡回指導教員）と連携しながら学生の実習での成長を支援していく必要がある。

そのため、実習事前指導において、実習中に学生が陥る「混乱・拒否・逃避」の状態をある程度予測しながら、この時期の学生のネガティブな姿勢が実習全体への影響することを最小限にとどめるような指導が重要である。それには、今回明らかになったような、実習前から実習後への学生自身の変化のプロセスを教員が理解し、実習前の不安な気持ち以上に、実習終了後に訪れるさまざまな変化や成長、自信に対して、学生が目を向けることができるように導いていくことが必要である。例えば、前年度実習を行った先輩の語り等を活用しながら、実習前の学生の不安を軽減していくことは有効ではないかと思われる。

また、各施設での支援の専門性を前提としながらも、施設利用者へのノーマライゼーション理念

を前提とした「ふつうのあたりまえの生活と欲求」をしっかりと理解させることで、前向きな実習姿勢を保持して、コミュニケーション面でスムーズに実習開始できるようにしていきたい。

本学では1年次の施設実習を今後の実習や学習の基礎であり、進路選択というより職業人への土台づくりの場と考えて、全教員で取り組んでいる。施設実習終了後、施設への興味を上げた学生には、自主勉強会・見学会、ボランティア活動や自主実習に導いている。そして、2年次の保育実習Ⅲ（選択科目）での施設実習を、施設の専門的支援を学習する場と位置付ける。

1年次の施設実習による学びと学生自身の変化を的確にとらえ、短期大学での2年間の学習の連続的な支援に結びつけ、どの現場でも通じる保育士養成に向けて取り組んでいきたい。

引用文献

- デンジン, N.K., & リンカン, Y.S. (2006). 質的研究の学問と実践. デンジン, N.K.・リンカン, Y.S. (編), 質的研究ハンドブック 1 巻——質的研究のパラダイムと眺望. (平山満義, 監訳) (pp. 1-28). 京都: 北大路書房. (Denzin, N.K., & Lincoln, L.V. (2000). Introduction: The discipline and practice of qualitative research. In Denzin, N.K., & Lincoln, Y.S. (Eds.), *Handbook of qualitative research. Vol. 1. Paradigms and perspectives in transition.* (2nd ed.), London: Sage Publications.)
- 岩崎美智子. (2010). 施設実習とは. 東京家政大学『教育・保育実習のデザイン』研究会 (編), 教育・保育実習のデザイン—実感を伴う実習の学び (pp. 49-52). 東京: 萌文書林.
- 川喜田二郎. (1967). 発想法——創造性開発のために. 東京: 中央公論社.
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局. (2001年発行/2013年一部改正). 「指定保育士養成施設における保育実習の実施基準について」. http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/hoiku/dl/tokurei3-2.pdf
- 岡村重夫. (1968). 全訂 社会福祉学 総論. 東京: 柴田書店.
- やまだようこ. (2003). フィールドワークと質的心理学研究法の基礎演習——^{フィールド}現場インタビューと語りから学ぶ「京都における伝統の継承と生成」. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 49, 22-45.
- やまだようこ. (2007a). 質的心理学とは. やまだようこ (編), 質的心理学の方法—語りをきく (pp. 2-15). 東京: 新曜社.
- やまだようこ. (2007b). ナラティブ研究. やまだようこ (編), 質的心理学の方法—語りをきく (pp. 54-71). 東京: 新曜社.